

俳句

大津俳句会

火の山の余熱のやうな草いきれ

井芹眞一郎

青紫蘇の一枚に膳ひき立ちし

秋山 恵子

風蘭と夕べの風を分ち合ひ

市原 初女

曾孫生る見舞ひに托すさくらんぼ

江藤 みち

十葉のみるみる庭に広がりぬ

大塚喜久子

更衣心機一転転院す

坂本 セキ

あぢさゐの小ぶりがそつと葉隠れに

佐賀 久子

薔薇真赤色を濃くして語りをり

原田 順子

紫陽花の少し疲れて首を振る

武藤 規子

粒ごとに光る一杓さくらんぼ

渡邊佳代子

俳句

つのはな句会

五月みずうみ誰もが魘^{うたた}すすぎに来る

星永 文夫

嘘ツイタテッペンワスレタ時鳥

酒井 豊美

笹そばを食って万緑に安坐して

志賀 孝子

藍色の絵具がにじむ太宰の忌

田上 公代

紙魚^{しみ}の棲む古文書江戸を抜けて来る

木庭 杏子

ホチキスで止める昭和と入道雲

上杉 波

ところてん「真実」するりと逃げていく

矢嶋 道子

鳥帰る富士山くつきり見える朝

水野 春子

ヤマセミの呼ぶ声がする南阿蘇

梅木トキエ

クレンジングの香一日終つて夜おぼろ

塚本 洋子

短歌

大津短歌会

減り張りもばやけてきたる時世かな

若きらなべて行動緩^{ゆる}し

渡辺佐代子

夫の住む納骨堂をノックすれば

春風優しく耳元すぎる

豊岡ミツル

風わたり広き畑は麦秋の

黄金^{こがね}の色に波うち揺るる

岩下 文代

阿蘇よりの風は何故泣きさけぶ

嵐となりて夜の窓たたく

吉永 恵子

夕闇の次第に迫る路ゆきて

心静めてせせらぎを聞く

小平 善行

短歌

万年青短歌会

大檜なる切株は壺を抱きてか

遠き祖先^{みおや}を墓所に拝む

合志 妙子

地震避難解除となりし仮家にて

友の手作り芋煮メ食ぶ

山内 信子

もみ種の残りをすずめの餌食にと

五月雨寒き午後種時き

中山 春代

地震もありし月一度の短歌会

三十一^{みそ}ひともしに指をおりて詠む

磯崎テル子

老ゆるとは耐えゆくこと知りしとき

小屋の鶏ケツコーと鳴けり

河北 幸一